

F ACULTY D DEVELOPMENT

I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 16 号

January. 30, 2006

FDウィーク第2回目は？

本年度第1回のFDウィークは実技系科目2人の先生方によって行われ、好評を得ました。本年度は引き続いて12月に2週にわたって第2回目のFDウィークが開催されました。今回は人文系の2人の先生の授業公開でした。第1回の授業公開は12月9日の2時限で、社会教育講座の大隅清陽先生の「日中交渉史I」の授業でした。対象学年は1年～4年対象です。第2回の授業公開は12月19日4時限で、国際文化講座の清水知子先生の「英米テキスト分析 A/英米文学講義」の授業でした。対象学年は3年～4年対象です。

大隅先生の授業は、20人弱の学生が参加し、1時間30分終止集中力を切らさず学生達が先生の授業に耳を傾けていました。授業はまず、前時の授業の最後に回収する質問用紙への回答から開始されます。質問の内容はどれも深く、講義を理解し、さらにテーマについての問題意識を持っていないとできないようなものでした。当日の授業は遣唐使の歴史を通観しながら、日中の外交の間で揺れ動く留学生の立場が詳しく説明されていました。また、丁寧な板書と先生の講義は静かに進みますが、時々現在の世界情勢との関係づけが行われていました。話の内容は、密度は濃いのですがコンパクトにまとまっていて、先生の話し方もメリハリがあるものでした。授業後にこの授業における工夫を先生に尋ねたところ、やはり質問用紙を配って、その日聞いた授業内容について質問や疑問を学生に書かせ、その回答を次回に行うことだと述べていました。次回の授業で実際に回答される質問は選ばれた何人かのもので、学生は自分と同じ学力レベルの他の学生がこんなにもすごい質問をするのかと思ひ啓発されるようです。

次に、清水先生の授業は、学生があるテーマについて調べてきて、それをクラスの前で発表し、クラス全体で議論をし、最後に教師が講評を加えるといったゼミ形式の授業でした。日本のアニメーションが海外ではどのように評価されているかというテーマを追求する中で、日本文化を世界に向けてどのように発信していくべきかという問題にもふれているようでした。今回は学生の発表と議論が中心でしたが、その前に教師の本テーマについての概説的説明があったのは言うまでもありません。当日は、学生の1人が美少女戦士セーラームーンを取り上げ、このキャラクターが海外でどのように受け入れられ、アニメの描写自体にどのような問題点があるかをDVDなども使う中で丁寧に説明していました。発表の後には、ジェンダーの問題について、女子学生も男子学生も平等な立場で議論を行っていました。清水先生は、議論の中で発言の偏りを是正したり、

日本のアニメに戦闘シーンが多いのはなぜかについて、学生の視点を変えさせる質問やコメントを効果的に提示しており、それがとても印象的でした。当日は学生の発表が熱心さの余り長引いて、議論の時間が少なくなりましたが、全体的に学生主体の授業を効率よく進行させていました。内容的にも議論の深まるテーマ設定も優れたものであったと思います。(TF)

FD ウィーク公開授業（その1）：「日中交渉史Ⅰ」

〔授業者の思い〕 質問用紙による対話のすすめ：大隅清陽（社会教育講座）

今回授業公開をしました「日中交渉史Ⅰ」は、学校教育課程・社会科教育専修と、国際共生社会課程・国際文化コースの専門科目で、大学で歴史学の専門講義を初めて聴く学生を想定した概説レベルの授業です。遣隋使・遣唐使を中心とした、7世紀の東アジア諸国（日本・中国・朝鮮半島諸国）の外交史を素材に、歴史的なものの見方・考え方を修得し、それが現代において持つ意味を、学生に自ら考えてもらうことをねらいとしています。

私の専門は歴史学なので、授業は口頭説明と板書を中心とした昔ながらの講義形式であり、いわゆるFDの参考にさせていただけるような特色はほとんどありません。強いて挙げるなら、いわゆる史料批判（テキストクリティーク）によって多面的な思考力を養うため、当時の一時史料を中心としたかなりの枚数の資料プリントを配布し、その読解を通じて、受講生に自ら歴史像を組み立てるよう促していること、毎回の授業の終わりに、その時間についての質問をB7の小さな紙に書き提出してもらい（ミニットペーパー）、そのいくつかを、次回授業の冒頭で紹介し回答することによって、前回までの復習や、理解の深化・発展に役立っていることがあります。

後者の質問用紙（ミニットペーパー）については、授業後のミーティングでも、参加の先生方から多くの質問をいただきました。このミニットペーパーは、もともとは授業への「コメント・感想」を書かせていたのですが、単に「面白かった」「難しくてよく分からなかった」といった一方的なものが多かったため、講師と受講生との対話＝キャッチボールを半ば強制的に成立させるため、ある時期から「質問」に限定してみたものです。専門の勉強を始めて間もない1～2年生の場合、学問的な対話を成立させるための「問い」の立て方自体がよく分かっていないケースも多く、開講当初には、稚拙だったり、的はずれな質問も多いのですが、毎回の授業のなかで優れた質問を紹介していると、それに啓発されて全体のレベルが上がってきて、学期が終わる頃には、私自身もはっとさせられるような本質的な質問が、面白いほど頻出するようになります。シンプルですが、意外に奥の深い方法だと思いますので、興味のある方は是非一度お試しください。

〔授業参加者の感想〕 教員・学生アンケートの結果

今日の提案ではどのような点が工夫されていましたか。

●板書と口頭説明が中心のため、その内容を学生は工夫してノートにまとめなくてはならない。そのため学生は講義に集中せざるをえなくなる。●講義の最後に学生に質問・感想を書かせて提出させ、優れた質問については次の授業で取り上げている。●多くの点がわかりやすく簡潔にまとめられている

自分の授業に生かせる点はどのようなことですか。

●学生の質問が授業に効果的に取り入れられている。 ●板書を簡潔にしている点。

お気づきの点を自由にお書きください。

●口頭での説明が流暢で聞きやすく、また、わかりやすい。●このようなわかり易いお話をお聞きしたのは初めてで、大変感動し、また歴史が身近に感じられました。●先生のように教えていただけると、実に興味深く当時の中国・朝鮮と日本の関係がどうであったのかということがとても理解できます。●学生達が大変熱心に受講していました。大隅先生の講義に対するご姿勢とお人柄のためだと思いました。

●歴史の大きな流れと個々の政策との関連がとてもわかりやすく、大変勉強になりました。

FD ウィーク公開授業（その2）：「英米テキスト分析 A／英米文学講義」

〔授業者の思い〕 FD 公開授業を体験して：清水知子（国際文化講座）

今回の授業の構成は、後期の前半 10 月、11 月で私が授業のテーマについてアカデミズム、あるいはジャーナリスティックなレベルで論じられてきた見解と見取り図を紹介し、現状の問題点、課題を提示することとし、後期の後半 12 月、1 月はそれらの議論のなかで各自が自分の関心からテーマを見いだして発表し、それをもとに議論していこうというものでした。また、発表では、テーマの多義性を考慮して、学生による司会とコメンテータをつけ、毎回、発表者と司会、コメンテータの趣向にそって展開していくことにしました。それは、この授業が教員免許の単位に換算できるものなので、授業の展開を学生主導にしたほうがお互い学ぶべきことも多いのではないかと考えたからです。そのため、すでに 12 月の時点では、いわゆる「授業」というよりも、学生主導の発表と議論を聞きにいらしていただくかたちになり、FD の先生がたにお忙しいなかでいらしていただいてよいものか、とかなり躊躇いました。

この予感はずばりの中してしまったようで、少し反省しております。

授業のテーマは、アニメーションというメディアを軸に、グローバル化下における近代性、前衛、亡命、文化混交について考えるというものでしたが、資料の渉猟という点からテキストそのものとしては日本発のアニメーションを取り上げる学生が多く、この日は「セーラームーン」とジェンダーというものでした。発表する学生とは事前に毎回打ち合わせをしていますが、当初、「セーラームーンは女の子向きとされているけど、本当は女の子向けアニメじゃないと思う！」と言う学生の構想が興味深く、戦闘少女もので発表してもらうことになりました。発表そのものは熱意に満ちたものでしたが、それゆえに、過度に所定時間を過ぎてしまい議論を展開する時間が少なくなってしまったのが何よりも残念でした。これについては私のみならず司会と発表者も痛切しており、次の授業のさいに今後改善すべき点の一つとして学生と話しあいました。

毎回、FD の公開授業のお知らせを頂く度に、今度こそと思いつつ、なかなか参加することができなかったので、今回は逆の立場となってしまいました。本当に貴重な機会を頂いたことに感謝しております。まだまだ学ぶべきことがたくさんあることを切実に実感し、皆さまから頂いた貴重なご意見と自分なりの反省点を今後の原動力としていきたいと思っております。

本当にどうもありがとうございました。

〔授業参加者の感想〕 教員・学生アンケートの結果

今日の提案ではどのような点が工夫されていましたか。

●学生が興味をもてる、そして議論の発展の余地のあるテーマを与え、それを切り口に日本文化、日本社会の深層にせまりたいという気持ちにさせていた。

●提案（内容を含めて）、進行が学生の側に 100%まかされていること。

自分の授業に生かせる点はどのようなことです

●議論のためのツールや枠を発表者も質問者も意識しているよううかがえた。

●ディスカッション進行における学生の主体性。

●大変自由な議論ができる雰囲気を作ることと授業中の紙資料とデジタル映像の利用。

お気づきの点を自由にお書きください。

●出席者が大いに乗っていたためか、90分ではとても収まり切れない授業だったと思う。

●講義名から想像した授業とはだいぶ違っているものでした。

●1人だけでなく、他の学生の資料も活用すべきであった。

●学生達が自分の意見を自由にフリートークで話していたのが印象的でした。

●大半の学生は楽しそうであった。

リレーエッセイ：「わからん」学生時代から、かれこれ40年

ソフトサイエンス講座 鈴木俊夫

私が大学3年になったときだった。「さあ、数学専門課程に進学したぞ。」と新鮮な気持ちでじっくり耳を傾けて聞いた最初の授業で、I教授は「一番望ましい学生は、自分で勉強して講義には出てこない人、次が…」と言った。向学心に燃えた単純な若者としては当然「望ましい学生」を目指した。ところが不覚にも、勉強してもわからないことは簡単にはわからない。とにかく時間がかかる。実はI教授の話には「講義を聴かずに試験が出来るのが最もいい。」という続きがあったのだ。凡人が「望ましい学生」になるのは容易なことではないと悟ったのは学期も終わる頃で、すっかり「数学がわからん」学生になっていた。

次の学期からはなるべく講義は聴くようにした。どの教授も講義が始まって10数分経つと後頭部の一部があざのように赤くなるのを発見したのはこの頃だ。講義のスタイルは千差万別だが、記憶を呼び起こすのではなく数学のプロセスを頭の中で再現しつつ話しているためらしいと後で気がついた。たいていの講義が「よくわからん」の連続だったが、数年経ってみれば何とかなっていたのだから、こういう学び方もありということだったのだろうとってはいる。大学院になって身の程がわかるようになってきた頃、アメリカから帰った小平教授の講義を聞いた。自分の専門とは違う話であったが、具体的な例を用いたわかりやすい講義に感心した。ほかに印象に残っている講義では、T教授の教養の微分積分学とS教授の大学院の専門の講義がある。教室に入ってきてから出て行くまでの120分間、ノートやメモなどを見ることなく、順序良くわかりやすい講義をしていた。また、これは聞きやすいと思ったのはF教授の講義で、最初の数分間で、簡単な復習をしてからその日の内容に入るやり方だった。

自分では学生の「わからん」気持ちは理解できるつもりでいるので自分が大学で教えるようになってからはそれなりに工夫をしている。具体的な例を示すこと、学生の様子を見ることに専念できるようにメモなどを見ないで話せるだけの準備をすること、毎回短時間でも前回の復習をして講義内容の位置づけを確認することなどを心がけるようにしている。ただ、頭の中で計算し、論理を組み立てながら話をすると、メモなどは見ないのだが、いつも学生に注意が向けられるとは限らないのが誤算だと思うときもある。

告白風に自分の講義の工夫の経緯を書いたが、今の山梨大学ではもっと別の問題を考慮しなければならぬのは本学部教員の共通認識だと思う。高校4年生とか5年生と言う言葉が聞こえてくることもあるように、自分が将来何になりたいかを考える手立てを提供したり、今受けている講義の内容をわかりたいと思うような動機付けを工夫してやらなければならない。この点に関しては教員養成課程では幾分楽な面があるかもしれない。ちょっとでもわからなくなり始めるとさっさとやめてしまう学生に、そのうちわかるからと引き止めておくのはなかなか難しく、説明中に他でやっているはずの事が出てきたとき、わからない様子が見えるとその部分の説明を補充したりして繋ぎ止める努力もしている。おかげで予定通り進まないことが多いが、やめてしまって元も子もなくなるよりはずっといいと腹を据えている。私自身の年齢との乖離が大きくなっているせいか、毎年のように学生の状況が変化しているように感じられる。大学FD活動がますます重要になってくると思うこのごろである。

今回のエッセイは家政教育講座の近藤恵先生にお願いいたします。